



特別
千2
4212
22



42
4212
22



量脱晋书原九月九月江戶親愛人江當橋而近淺あり
江戶開市考

星沈三、十六 夏候陽算程曰宋元嘉九年徐愛鑄銅斛

用二尺三寸九分梁大同元年甄鸞校之

用二尺九寸二分其時異變斗尺不同云々

同上十七才晋書云々親量積

考
首

This page features a red rectangular border enclosing a grid of 15 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. The page is otherwise blank, with some minor foxing and small dark spots.

Handwritten red text in the left margin, including the characters 女, 氏, and 山.

This page features a red rectangular border enclosing a grid of 15 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. The page is otherwise blank, with some minor foxing and small dark spots.

Handwritten red text in the right margin, including the characters 山, 氏, and 女.

晉書律曆志曰量法三魏陳晉王景元四年劉徽注九章商功曰當今大司農斛圓徑一尺三寸五分五釐深一尺積一千四百四十一寸十分之三王莽銅斛於今尺為深九寸五分五釐徑一尺三寸六分八釐七毫漢書南內曰大司農斛乃魏世官斛大司農掌之故商云量說云此蓋魏初杜夔所造而劉徽亦魏人云其所謂今尺亦謂魏尺也

△魏尺當曲尺七寸八分

劉徽注徑平五寸同平百五十七同法三一四

徑一尺三寸五分五釐

半徑六寸七分七釐五毫

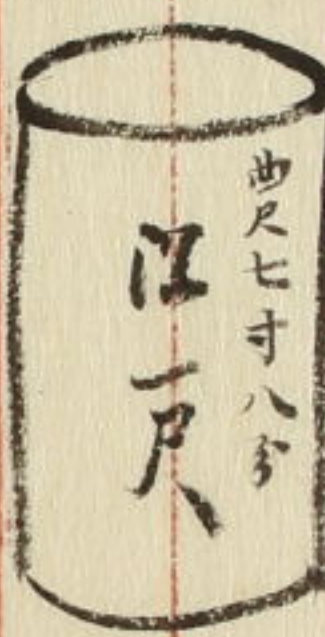
周四尺二寸七分五釐七毫

半周二尺一寸三分七釐八毫
半周二尺一寸三分七釐八毫
半周二尺一寸三分七釐八毫

○此後千四百四十一寸二十七九六二五

魏量斛積

曲尺七寸八分



一尺

四徑四尺
一尺五分六釐九毫

六八九九六二二八八六
六八五九六二二八八六
六三一九六二二八八六

四九五

曲尺七寸八分

同半徑三寸九分

曲尺同三寸五分九釐九毫

同徑一尺五分九釐九毫

面積八七六八七四五二三八五

積六百八十五寸九百六十二分二十八釐六百毫

京外一斛〇五合八勺一厘四為二六三九者

外量比例
一六四八二七
二二九六五四
三一九四四九
四二五九三〇八
五三三四一三五
六三八九六二
七四五三七八九
八五八六一六
九五八三四四

百柱香記の序

本邦にて香薫をめぐつことハいと其竹世として詳ま
るりうへきと百濟國より仏法の渡りし時より始り

鷓鴣命畏急成出籠之鳥歡厭日件介魚道合
戦之由編於在地國日記已了以其明日歸
於本堵自茲以來更無殊事然間依前大原

興世主与武芝舎和此事之間各傾數坏披榮
花而間武芝之後等無故而圓彼徑基、營
所介徑基未練

本邦茶入作者傳

初代加藤四郎左衛門 藤四郎

○古瀬戸 ○辛子 ○名物唐物

本邦ニテ始メテ茶入ヲ造リ出シ、ハ初代藤四郎ナリ此人原ト尾張國ノ住人加藤次景康ノ家人ニシテ天性陶製ニ巧ナリ于時實朝將軍ノ世始テ点茶流行ス當時將軍家ヨリ諸公家及ヒ大名ニ新茶ヲ贈進スルノ儀アリ之ヲ献茶ト云フ然ルニ其器茶ノ様一定セガリキ或時將軍家加藤次景康ガ家人ニ四郎左衛門ナル者ノ陶工ニ精妙ナルコトヲ聞キ給ト四郎左衛門シテ

箱メテ 献茶ノ器ヲ造ラシム之ニ依テ尾張國瓶子空ニテ始メテ茶壺ヲ製ス其ノ器ノ高廿一

寸五分ヨリ三寸ニ至ル形状^此芋ニ似タルヲ以テ
之ヲ芋ノ子トイフ將軍家大ニ之ヲ贊賞シ給ヒ
近江國ニ於テ五十町ノ地ヲ^{四郎左工門}賜フ^此
ニ^世因テ本姓千野ヲ改メテ主家ノ姓ヲ襲フ^復
加藤四郎左工門ヲ略稱シテ藤四郎ト呼フ爾來專
ラ茶壺ヲ製出スト雖トモ釉藥ノ調和意ニ適セガ
ルヲ歎キ之ヲ^實朝將軍ニ訴フ是ニ因テ建曆二
年三月入宋シテ陶法ヲ學ビ建州ノ陶土ヲ以テ茶
壺ヲ造リ彼ノ法ニ倣ヒテ椿灰躑躅灰^用ヲ試ミニ
釉水始メテ意ニ適セリ●因テ彼ノ地^此テ數種ノ茶
壺ヲ^製歸朝ノ後チ北条泰時シシテ母^之ヲ將軍
家ニ獻ズ今世ニ傳ル所ノ名物唐物茶入ト稱スル者
則チ是ナリ千時文曆元年正月十七日死ス年五十

七

代二 藤五郎

四郎左工門ノ^子父ノ^業雖トモ其

伎拙劣ナルヲ以テ茶入ヲ造ラズ多ク大瓶業茶
壺ヲ製出セリ千時建長二年死ス年三十一

代三 藤三郎

○禾目 ○玉柏 ○青江 ○篋目出

藤五郎ノ嫡子ナリ建長二年十四歳ニシテ父藤五
郎死ス十五歳ノ時ヨリ陶製ヲ能クシ祖父藤四郎
ニ優レ古今ノ妙手ト稱セラル而テ舎弟藤二郎
父●家ヲ嗣キシ後チ祖母懐トイフ地ニ更ニ室ヲ築
キ專ラ茶壺ヲ製ス或ル時藤三郎建州ノ天目ヲ見
テ之ニ擬セル茶壺ヲ造ラントス

東法

東法

東法

法

東

東

兩種名香考按

文龜元年九月

志野宗信筆記云兩種の名物ハ殊々木色追能々見る
事尤候同木のうちにて木所より事外は遠候
事也

太子の返一三度追よく追よく追よく此外も無用なり
蘭奢待返一十度追よく追よく追よく此字ハ秘
事也

法隆寺ハ天竺より太子御取被成渡給ふ香は候
何の世にも出る汝汰あり然は祿をみの穴より氣
引出して世に度まるりしを申傳候法隆寺宝蔵
に被籠候て在之故法隆寺と云又御名をかとり
太子とも申也

東大寺ハ御所様御一代一度奈良へ御参詣の時

為^連物昔より一寸四方泰候然^ハまれなる子細候
但太子よりハ類^ニ在之義^ニ候哉木色三色^ニ
在之也

御吉野ハ東大寺のうそみといふなり
道遙ハ南都法花寺^ニ有とい^ハり東大寺の皮と申
傳^ルり

軋

志野宗信香合式真書云永録
元年月日省也名香合の儀云々太子東大寺
を^ハ被^レ相除其外十種之内又五十種之内を可^レ被^レ出候

軋

建部隆勝香之記 真書云天正元年
十月日建部隆勝太子号法隆寺
蘭奢待号
東大寺如此名物の香之内焼候^ニ重^テ香つづ^ク候
云々

法

名香聞之事法隆寺太子
赤旃檀聞^ハい^ハる^ニもやさ
しく^ニや^ハる^ニ涼しく御座候

東

東大寺伽羅聞をそく出る又聞失候やう^ニ御座
候^テ又聞出申候かやう^ニ四五度ほど御座候^テ以
後次第^ニ聞か^ス候^ハひ^ハる^ニ香出申候

東

小笠原香之託云東大寺天下無双の名香也或説^ニ
公方御一代^ニ一度御参詣な^レ此候時一寸四方^ニ
此候^ハり

三吉野東大寺の白々と云古説有
道遙蘭奢待の皮めと云説有川道遙と云心^ハり

や
香
首

元禄十一年 遠向ノ四ノ

○新大橋ノ元 十有以爲十二

貞享四年 杜吉ノ

○池田ノ三ノ所ノ湯ノ五ノ日ノ不ノテノ廣ノカノ路

元禄十四年 重板ノ

○永ノ森ノ又 日大橋ノ元 〇雨ノ元ノ 今ノ北ノ三ノ

元禄十五年 〇石ノ川ノ流ノ

〇石ノ川ノ天ノ巴ノ所ノ村ノ三ノ直ノ院ノ垣ノコノ杭ノヲノ

宝永三年 〇石ノ川ノ流ノ

〇石ノ川ノ流ノ及ノ故ノテノ出ノカノ城ノ部ノ十ノ

享保五年 〇石ノ川ノ流ノ

〇石ノ川ノ流ノ及ノ故ノテノ出ノカノ城ノ部ノ十ノ

享保二年 〇石ノ川ノ流ノ

〇藤ノ堂ノ表ノ門ノ通リノ所ノ池ノ川ノ流ノ及ノ故ノテノ出ノカノ城ノ部ノ十ノ

延享四年 杜吉ノ

〇藤ノ堂ノ表ノ門ノ通リノ所ノ池ノ川ノ流ノ及ノ故ノテノ出ノカノ城ノ部ノ十ノ

享保十一年 〇石ノ川ノ流ノ

〇藤ノ堂ノ表ノ門ノ通リノ所ノ池ノ川ノ流ノ及ノ故ノテノ出ノカノ城ノ部ノ十ノ

享保五年 〇石ノ川ノ流ノ

〇藤ノ堂ノ表ノ門ノ通リノ所ノ池ノ川ノ流ノ及ノ故ノテノ出ノカノ城ノ部ノ十ノ

享保二年 〇石ノ川ノ流ノ

〇藤ノ堂ノ表ノ門ノ通リノ所ノ池ノ川ノ流ノ及ノ故ノテノ出ノカノ城ノ部ノ十ノ

享保元年 〇石ノ川ノ流ノ

〇藤ノ堂ノ表ノ門ノ通リノ所ノ池ノ川ノ流ノ及ノ故ノテノ出ノカノ城ノ部ノ十ノ

見用集を揚
まゝに江戸所
十七年の
地立を

江ノ原の
地立

文記

慶長六年(十二)二月二日駿河の歌より出火江戸市中一字を

焼失す此際所考の(中)草草なり(中)板草子なり(中)

此時市町三丁目(中)御山の次(中)と(中)考あり(中)板草子の表例を(中)瓦草(中)表の方を

御板草(中)此草世(中)市して半瓦板草と(中)稱す是(中)江戸瓦草の(中)類なり(中)濫觴

日幸橋

慶長八年(十六)四月七日日幸橋を造り

八年諸國の(中)舟を(中)より(中)人歩を集めて神田の(中)基(中)の上を以て豊嶋の洲

崎(中)今の(中)を築立陸地と(中)なり(中)三丁(中)此時に江戸ノ慶(中)南(中)品川(中)邊(中)西(中)田(中)原

北(中)神田(中)の(中)原(中)東(中)八(中)幡(中)草(中)二(中)丁(中)なり

明暦地立場所

今、芝浦(中)陸軍省用地(中)なる(中)り(中)〇(中)演(中)歌(中)宮(中)一(中)箇(中)地

築地(中)一(中)丁(中)なり(中)〇(中)築(中)地(中)の(中)六(中)丁(中)前(中)所(中)東(中)邊(中)へ(中)あり(中)たり

北(中)八(中)幡(中)崎(中)より(中)起り(中)て(中)豊(中)島(中)崎(中)なり(中)〇(中)築(中)地(中)一(中)回(中)南(中)に

演歌宮(中)常(中)時(中)甲(中)府(中)相(中)ノ(中)屋(中)敷(中)に(中)なり

此際(中)の(中)埋(中)立(中)箱(中)崎(中)より(中)起り(中)て(中)豊(中)島(中)崎(中)ノ(中)東(中)南(中)の(中)方(中)に(中)埋(中)立(中)て(中)夫(中)より

西(中)へ(中)米(中)杭(中)所(中)を(中)穿(中)り(中)て(中)築(中)地(中)一(中)回(中)南(中)に(中)演(中)歌(中)宮(中)に(中)至(中)る(中)〇(中)常(中)時(中)甲(中)府(中)相(中)ノ(中)屋(中)敷(中)に

官(中)僚(中)ノ(中)宅(中)地(中)〇(中)實(中)例(中)園(中)を(中)以(中)て(中)對(中)面(中)に(中)て(中)造(中)ら(中)る(中)なり

中(中)指(中)原(中)小(中)路(中)〇(中)西(中)へ(中)米(中)杭(中)所(中)を(中)穿(中)り(中)て(中)築(中)地(中)一(中)回(中)南(中)に(中)演(中)歌(中)宮(中)に(中)至(中)る(中)〇(中)常(中)時(中)甲(中)府(中)相(中)ノ(中)屋(中)敷(中)に

又(中)餘(中)分(中)片(中)岸(中)より(中)大(中)門(中)垣(中)を(中)造(中)り(中)長(中)八(中)丁(中)の(中)土(中)手(中)を(中)築(中)く

又(中)餘(中)分(中)片(中)岸(中)より(中)大(中)門(中)垣(中)を(中)造(中)り(中)長(中)八(中)丁(中)の(中)土(中)手(中)を(中)築(中)く

又(中)餘(中)分(中)片(中)岸(中)より(中)大(中)門(中)垣(中)を(中)造(中)り(中)長(中)八(中)丁(中)の(中)土(中)手(中)を(中)築(中)く

又(中)餘(中)分(中)片(中)岸(中)より(中)大(中)門(中)垣(中)を(中)造(中)り(中)長(中)八(中)丁(中)の(中)土(中)手(中)を(中)築(中)く

南八幡町九丁目
西八幡地内五
東八幡町川
北八幡町の北
八幡町七丁目
八幡町の

又(中)餘(中)分(中)片(中)岸(中)より(中)大(中)門(中)垣(中)を(中)造(中)り(中)長(中)八(中)丁(中)の(中)土(中)手(中)を(中)築(中)く

又(中)餘(中)分(中)片(中)岸(中)より(中)大(中)門(中)垣(中)を(中)造(中)り(中)長(中)八(中)丁(中)の(中)土(中)手(中)を(中)築(中)く

行徳二道 長三十四町
立川 長三十四町
長三十四町

八合の枝川 長三十四町
長三十四町

長三十四町
長三十四町

唐長見聞集
十九年ノ記ナ

火災前八合の向両岸野の口ハ舊新田今の油川ハ牛嶋新田ノ町
家々 火災後 油川本流の地を潤き 西國川より中川又通つ
二條を同整も一ハ立川より其長四十四町四十七町一ハ行徳川より長十四町係
枝川 南北ハ長三十四町三十三町の川を 今の枝川はより 而て此は
の川筋は従て方正の町筋をなす

北の夜長長松草成る 近江社
明曆三年正月十八日 未 本仰九山本朝幸より出火 翌十九日 即小石川
餅 鷹師町より水一 又同日 麹町五町目より出 此三河川一
江戸城下悉く焼失を 何日 火災に罹りて死者者十萬二千五百餘人なり

定之 今の八代洲河川二所流あり
道三河等の南北河あり

實日今見 深川幸所といふ 新世界を建させ 一ハ是れ全く當付市區改正の賜
のちり
又海巴の繁出
是也
雨車 著き
是より後 三百三十
今の市區改正ハ 和入國と降第四期の市區改正也

由是觀之
由之觀之
由是觀之
由之觀之
由是觀之
由之觀之
由是觀之
由之觀之
由是觀之
由之觀之



深川
常三下
高三下
中三下
如三下
佐三下

此河川
此河川

此河川
此河川

身定

今二
今世ニシテ
長人ハ甚ク稀ナ
ル

近世ノ境ヨリ掘出ス可ク
甲冑ヲ見ルニ
其形ハ
大形ニ至テ今日ノ人俾ニ適セズ
古ノ人ハ今ノ人ヨリ
長大ナルコト思フベシ
其性

隋志ニ載キ

辨ニ推カルハ

未尺ハ
尺ノ考
考ニ備

君臣ノ向ニシテ

君臣ノ向ニシテ
用并ニモノニ

其ノ形ハ
尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

其ノ尺ニ倣
世
とシモノナ
ル

舊神王皇
尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

尺ノ考
考ニ備

黒川大人ノ説ニ
函字ノ上ニ
字ヲラン

日本史ニ
蓋古王ノ加後利
君ニ依ル又百濟新
抄

止ルハ
得ルハ
理ナリ

尺ノ考
考ニ備

フ引ラ
日己巳年孟南王立ト
日己巳年八未元美六年ニシテ孝建二
年ニ先コト二十六年ナリ

Table with multiple vertical columns, mostly blank, possibly for a table of contents or data.

大日本歴代人口推測表説明

本邦ニ於テ民口ヲ校スルコトハ崇神天皇ノ御宇ニ起リ孝徳天皇ノ大化
二丙午年始テ戸籍ヲ編成ス爾來毎六年ニ班田ト共ニ編算セリ
余曾テ上古ノ人口ヲ考究セントス然ルニ正史格式一モ戸口ノ數ヲ徵証
スヘキモノナシ適マ東大寺正倉院古文書中大寶二年御野篁前
聖前諸郡戸籍帳卷老五年下總諸郡戸籍帳如前皆是郷
里部内ノ戸口ニ止リテ一郡一國ノ大數ヲ推知スル能ハズ蓋シ體源抄
及ヒ太平記評判ニ載ル全國ノ人口又或書ニ推古天皇ノ御宇上官
太子ノ數ハ給ヒシ人口行基菩薩ノ校ゼレ全國男女ノ數等得散見
スト雖ハモ皆以テ信スルニ足ラス余正史格式ニ據テ按スルニ大化以降ハ
戸籍帳其實數ニ得ハ僅ニ百五十六年間ニ過キ不弘仁承和ノ頃ニ
歸ス延喜十七年阿波國板野郡ノ戸籍以テ證スベシ是ヲ後王制漸ク

余曾テ明治九年
歴代ノ人口ヲ考
要政ニ載ル仁十四
太宰府九國
ノ口分田ノ數ヲ起
算シテ全國ノ人口
ヲ推測セシガ終ニ通
當ノ數ヲ得スニ止
ム
國史格式等ニ據
テ
大化以降
利邊行ノ
戸籍帳ノ如キ其
數ヲ載ルハ信
五六十等向ニ過

今見ル所ノ古今別世中
之ヲ最トス

終ニ 利度地、至ニ 幕府ノ世トナリテ 守護地頭ヲ置
衰ハ 戸籍 編成ノ 舉アルヲ 聞カズ 武家ノ 世トナリテ 守護地頭ヲ置
キ 封建ノ 國勢ニ 沿革ス此ニ 於テ 戸籍ノ 必用ナキニ 至ル 徳川幕府ノ
初世ニ 及テ 文運漸ク 開ケ 制度稍 備レリト 雖モ 未タ 民籍ヲ 校セズ
八代將軍 家宗公 始テ 全國ノ 人口ヲ 編算ス 計局 秘録ニ 享保十七
壬子年 全國人口ノ 總計ヲ 載テ 二千六百九十二万 千八百十六人ト 凡
モノ 則テ 存邦 戸籍ノ 中 與ナシニ 兩来 毎六 年子年ト 午年ヲ 以テ
戸籍 改正ノ 年期ト ナス 而テ 其 方法ハ 公領ハ 代官 私領ハ 領主ニ 命令
シ 其 調査ハ 春ヨリ 十一月ニ 終リ 十二月ヲ 以テ 納成スルヲ 格例ト ス但シ
此帳簿ニ 編入セザル 種類ヲ 舉レバ 武家 方奉公人 又者 及び 部屋者
浮浪人 無宿者 非人 乞食 等ナリ 已上 除籍ノ 人口ニ 至テハ 其實
數ヲ 推知スル 能ハズト 雖ドモ 大約 百万内外ニ 達スベシ 故ニ 戸籍ノ 實
百萬 人ト 見做テ 之ヲ 加フレバ 二千七百九十餘 万人ト ナル 而テ 余 諷ニ 寛
延三年 諸國人 別帳ヲ 以テ 明治六年ノ 戸籍ニ 對照シテ 各國人口

増加ノ 多寡ヲ 比較スルニ 往々 大藩ノ 領國ニ 比シ 他國ニ 比例ヲ
見ガレモ ナリ 其 最も 著キ 薩摩國ニ 僅ニ 百二十二年 間ニ 殆ド 三倍
ニ 達セリ 加賀越中ノ 二國ハ 二倍 此ニ 亞テ 能登安藝 用防肥前 日向
大隅 共ニ 七割ノ 増加ヲ 當レリ 蓋シ 此増加ノ 理由 未タ 詳ナラス
ト 雖ドモ 恐クハ 領國ノ 人口ノ 數ヲ 隱蔽セシモノ 如シ 而テ 其 隱蔽
ノ 數 此數ヲ 百萬ト ナシ 總計ハ 二千八百九十
餘 万人ト シテ 享保十七年 全國人口ノ 實數ト 比シ 後 寛延
ノ 戶籍 室曆 明和 却テ 二千四百 萬人ニ 減テ 是ヲ 以テ 之ヲ 見レバ 享保
是ヲ 以テ 之ヲ 見レバ 享保 是ヲ 以テ 極テ 精確ナル 調査ニ
至リ 夫ヨリ 後ノ 改正ハ 唯 規ニ 依テ 帳ヲ 調製スルニ 止リ 且
戸籍 帳ハ 採ラザルナリ

